

## 今日の説教のポイント<ヨハネによる福音書1章1~5節>

### ①出来事の事実より、その意味から入るヨハネ福音書

福音書はイエス様の事実を、手紙はイエス様の意味を語っていると言えますが、ヨハネ福音書の冒頭はイエス様の意味から語り始めています。よって、ここを読む私たちも、「神様がこのヨハネを通して私たちに伝えようとしたことは何なのか、それを信じるとどのような世界が待っているのか」を考えることから始めなければならないのです。

### ②創世記の冒頭を考えながら語り始めていることの意味

「初めに言があった」(1節)という独特な表現で始まりますが、これは明らかに、「初めに、神は天地を創造された」という創世記の冒頭を意識した言葉です。創世記ではこれに続きさらに、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ』 こうして、光があった」と語られて行きます。「言葉一言」「闇一暗闇」「光」「創造一成る」といった言葉が、そして内容も、ヨハネ福音書の冒頭部分と重なるのです。ヨハネ福音書で、「言」がイエス・キリストのことを言っているのは確かですから(1章14節)、ヨハネは、「イエス様が創造主なる神様と関係しているのだ。と言うよりも、創造主なる神様がイエス様を通して(において)語られ、この世に光をもたらされ、私たちを救おうとして下さったのだ」と語ることから始めているのです(言語学でいう、記述言語ではなく、表現言語)。

### ③イエス・キリストこそが、私たちの人生を導いて下さるお方!

大事なことは、私たちがイエス様を本当に深く知ったら、光の中を歩めるようになるのだ、ということです! それをヨハネはこう信仰告白しています、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(4-5節)。

ここに出て来る「闇」という言葉で、「神に対抗する闇の帝王の支配」といったことを思い巡らすと的外れになります。ヨハネ福音書では、「闇」という言葉は「神様に向いて生きようとしめない人間自身の状態」を指しているからです。ですから、大事なことは、私たちがイエス様を救い主として受け入れ、真の神様の方に向き直し(回心)、真の神様に聞きながら(聖書に聞きながら)生きる者となることなのです!